

”街の記憶“へのタイムトラベル

《モダニズム心齋橋》展とは何だったか

橋爪 節也

Written by Setsuya Hashizume

失われた時を求めて

人間は過ぎ去った時代への思いから、古刹名跡に時代の残り香を探り、映画村や江戸村のテーマパークに遊ぶ。古代の哲学者プラトンが、地上のものは天上にある原型の模写と見なしたのと似て、そこでの体験は、あくまで過去の歴史を擬似的に追体験することではない。しかし、断片的な資料から時代の空気や雰囲気、意を復元なし得るのも人間の想像力であり、ある意味で美術館・博物館も、学術的考証を基礎に想像力の翼を広げ、「タイムトラベル」するためのタイムマシーンである。桃山時代の

美術」と銘打つ特別展では、絢爛たる金碧障壁画を前に歴史のロマンに陶酔できるし、町家を再現した施設では、江戸時代の日常生活を模擬体験できる。

平成十七年、私は大阪を代表する繁華街である道頓堀と心齋橋に関する二冊の単行本を上梓した。『モダン道頓堀探検』大正、昭和初期の大大阪を歩く(創元社)と、『モダン心齋橋コレクション』メトロポリスの時代と記憶(国書刊行会)である。前者は大正時代の雑誌「道頓堀」(道頓堀雑誌社)の精細な街並みのイラスト(写真1)に注釈をつけたもので、眺めるだけで時間旅行の旅人になった気分になる。後者は、大阪市立近代美術館建設準備室が開催した『モダニズム心齋橋』展の企画に携わったこと



【写真1】大正時代の道頓堀。雑誌「道頓堀」挿絵より

から誕生し、「心ブラ」を愉しむ側の視線で、ケ
ラシックを中心に昭和初期の心齋橋筋を書物
の中に再現、さらに当時の音楽や音を付録CD
で加えて、「街の記憶」を呼び覚ませようとした。
両書とも、書物の世界で近代都市へのタイ
ムトラベルを意図した点で、今回の本誌のテー
マに触れる。ここでは、モダン心齋橋コレクション
刊行につながった「モダニズム心齋橋」展につい
て、企画者として意見を少し述べてみたい。

「街の記憶」の展覧会

「大大阪」誕生八十年記念「モダニズム心齋
橋 近代大阪／美術とシティライフ」展は、大
阪市立近代美術館(仮称)心齋橋展示室で、平
成十七年一月から三月まで開かれた(写真2)。
主催は、大阪市教育委員会(近代美術館建設
準備室)、財団法人大阪都市協会、産経新聞社
の三者。心齋橋展示室は、中之島に建設予定の
近代美術館建設計画の遅れから、旧出光美術
館(ナガホリ出光ビル)を借りて所蔵作品を中
心に公開している施設で、最寄り駅は地下鉄心
齋橋駅である。産経新聞は大阪本社が湊町に
移転の年でもあった。

心齋橋をテーマにした展覧会は、平成九年に
《心齋橋筋の文化史展》が大丸心齋橋店で開
かれた。今回も、展覧会の対象は心齋橋の「街」
そのもので、美術中心に特化した内容であった。
近代の大阪は、東京や京都のような有力な官



【写真2】 島野三秋によるそごうのエレベーター扉。《モダニズム心齋橋》展会場

立美術学校がなく、強力な画壇を形成しな
かった。逆にいえば、大坂イズム(註1)の反映とい
うべき経済都市独特の文化芸術のあり方があ
り、それを特定の画家や美術団体が構成する
のではなく、「街」の美術に読み取ろうと企画し
たのである。

構成は全六章。明治の錦絵ではじまり、大丸、
そごう、高島屋など百貨店、夢二の版画も扱った
柳屋、丹平八ウスの赤松洋画研究所と丹平写真
倶楽部、河内洋画材料店関係の資料を並べ、三
木楽器ほか発行の美しい楽譜も展示した(註2)。
さらに意識の上で、「街」も屋外展示会場と

らえ、美術館を出た後、屋外展示の感覚
でヴォーリス設計の大丸百貨店(昭和八
年全館完成)に足を運んだ来館者も多
かった。一種のエコノミーシアムである。他
にも心齋橋には三木開成館、をぐらやビ
ル心齋橋駅など近代建築が残る。

カタログは、展覧会としての新しい試み
で、共催の大阪都市協会が、月刊誌「大
阪人」の特集号に「モダニズム心齋橋」を
組んだ。学芸員と雑誌編集者の共同作
業は、「モダン」か「モダニズム」かの用語
選択の問題も含め、視点が異なる本作
りの異種格闘技でもあり、展覧会タイ
トルは、大阪人「サイド」の案が採られた。現
在進行形の街を扱い、駅売店にも置かれ
る雑誌との提携は、展覧会と市民との距
離を縮めることになる。

展覧会は、様々な展覧会案内やタウン
ガイドだけではなく、協賛の心齋橋筋商
店街、心齋橋北商店街の両ホームページ、国土
交通省大阪国道事務所の月刊Webマガジン「道
マガ大阪」第十七号でも案内され、楽譜が陳列
された、心齋橋行進曲「も心齋橋筋商店街の
ホームページで試聴できた。ジャズよ尖端よ心
齋橋」と唄うこの曲は、地元の御津青年団一
分団の曲で、後に「大阪楽団」のレパートリーに
加えられた(註3)。

会期中のイベントでは、会場で陳列作品を前
に、毛利眞人氏による蓄音機によるSPコンサ
ートが開かれたほか、開催を記念して中尾書店
が、長谷川小信の鉄橋心齋橋の「立版古」復刻



【写真3】組み立てられた心齋橋の「立版古」（中尾書店復刻版）

版(写真3)を刊行、「立版古」は秋にも朝日新聞などがとりあげた(註4)。

「街」が主役のこの展示会は、開催前に決まっていたメニュー通りに作品を並べるだけでは完成しなかった。会期中に「街の記憶」が蘇り、資料が追加されて成長していく。「柳屋」モデル(ロンズ考現学)号(昭和六年)の表紙

に描かれた移動式カフェ「ノア、ノア」の経営者で、洋画家の眞島豪の遺族から、店の案内状などの提供を得たほか、大丸宣伝部デザイナーの金山新六による昭和二、三年頃の大丸ショーウィンドー飾りの記録写真も追加出品された(註5)。

現代は美術館マネージメントが問われ、集客のため、海外の有名作品や著名美術館の作品展が招かれることが多い。日本人があまり知らない西洋美術や画家が喧伝されることは、市民教養や審美眼育成には役立つだろうし、会場混雑で鑑賞どころではなくても、何十万人もの来館者で周辺の商店街が潤えば、町おこしに一役買ったと評価されることになる。その点、約一万人を少し越えた「モタニヌム心齋橋展」の入館者数は決して多くはなかった。しかし、町おこしを語るのであれば、興行本位の展示会とは別の可能性を秘めていた。それを示す例に、再オープン準備を進めていた

そこう大阪本店がある。「モタニヌム心齋橋」展の目玉となった展示品が昭和十年完成の旧そこう百貨店の華麗な時給螺鈿によるエレベーター扉であった。作者の島野三秋(一八七〇—一九六五)は明治三十七年(一九〇四)セントルイス万国博覧会で銅賞を得た漆芸家で、扉は屏風形式に改められて倉庫で保管されていた。それを、展示会場を入った正面に飾り(前頁の写真2)、「大阪人」でも見開きで掲載した。

モタンで豪華な装飾の美に、そこうも扉の価値を再確認し、秋の同店オープンでは、店内エレベーター廻りの装飾、記念品の珈琲カップ、トートバック、折り畳み傘のデザイン、さらには女優宮沢りえを起用し、昭和十年のオープン時のキャッチコピー「お遊びに、お買物に」を組み合わせたポスター、テレビCM、シャルなどに、三秋による扉のデザインを転用している(写真4)。

「法事」としての展示会

情緒的な言葉で語るならば、ここうした展示会は「法事」と似ている。「法事」では、参加者全員が語りあい、場の「主人公」である故人の個性や多面性を再発見、再確認する。「モタニヌム心齋橋」を大正生まれの祖父に見立ててみよう。祖父の「法事」の席上、昭和十年生まれの息子は、戦後の父親がいかに厳格で、苦勞したか述懐する。反対に故人の兄弟や悪友は、若い時、彼がモタンで遊び人だった話を語る。高度成長期に育った孫の

代となると、お小遣いをくれた優しい祖父を語る。そして生前、本人に会ったことのないひ孫たちは、親の世代の思い出を総合し、自らのアイデンティティを探ることになる。

「モタニヌム心齋橋」展も、親子三代の来館はさらで、にぎやかな会場で年配の方が若い人たちに当時の思い出を語り、質問に答える光景が見られた。懐旧の念から、五回以上、来館した老婦人もおられ、モタンな時代に心齋橋で青少年期を過ごした人たちと、それを知らない若い人たちが自然に交流した。

ここで注意すべきは、公的な展示会という場こそ「街の記憶」は万人に開かれて検証され、オンライン化されたことである。それまでは当時を知る人たちが知的好奇心に満ちた誰もが、心齋橋に象徴されるモタン大阪の都市文化を気にしながらも、本当に語る価値があるのか分からなかった。準備室という変則的な状況下ながらも、公



【写真4】そこうオープンの記念品、エレベーターの扉絵のデザインが用いられている

的機関の開催で保証されたことで、「街の記憶」も、個人的な思い出を超えた価値ある「公共財産」として認識され、安心して語られはじめ、次世代へと伝えられたのである。

「大阪人」のジャーナリスティックな面も、従来の美術館ではできない形で読者にアピールした。難解な論文が付随した図録は、時に美術館の権威による押しつけなど一方的な情報を伝えるが、入手も容易で、心齋橋ゆかりの人々のインタビュー記事もふんだんな雑誌形式によって、読者と編集サイドの親密な「双方向性」のうちに、気軽に過去の心齋橋へのタイムトラベルが可能となった。

そう考えると、大阪では、自らの過去の美術に対する「法事」的な展覧会があまり開催されていない。採算を絶対視すると、大阪に関する企画展は集客力が乏しく開けなくなるし、反対に回顧展がない限り、どんな有名画家でも忘れ去られてしまう。東京・京都の大家は、全国の美術館、百貨店が展覧会を開催してくれるが、大阪の画家は、当の大阪が開かない限り他所では開かれない。この悪循環の結果、現代の大阪は、木村兼葎堂は知らなくとも、エルメールの名は聞いたことがあるような転倒した状態を作り出している。

祝祭の展覧会 文化の「植林」

「モタニズム心齋橋」展から半年後の九月七日、二十一日、再度、モタン心齋橋をとりあげ、そこが心齋橋本店の開店記念展「心齋橋物語

煌めくモタニズム」が大阪都市協会と毎日新聞社主催で開催された。同じ九月七日、大丸ミュージアム心齋橋も「パリ・モタン一九二五 一九三七」エコール・ド・パリ&アール・デコの世界」を開いた(九月十九日まで)。同時期に心齋橋の二大百貨店でモタニズムの時代がテーマとなったことは興味深い。後者のチラシには、「美の回廊・心齋橋のモタニライフ」の題で、歴史的な建築である大丸の豪華な建物の紹介記事も付され、「モタニズム心齋橋」展の余韻を感じた。

しかし本来は、昨年、大阪で開催すべきだったのは、成立八十年を迎えた「大大阪」の展覧会だった。大正末から昭和初期、各地で市町村合併が進んだ。大正十四年の「大大阪」成立は、「大京都」(昭和三年成立)、「大東京」(昭和七年成立)に先駆けたものである。平成の大合併が進行中の現代との並行現象としても、「大大阪」を考え直すことは有意義であろう。市内の博物館施設が連携し、美術、歴史、建築、生活など分野ごとに展覧会を開ければ理想だったが、美術面で「大大阪展」を担う「モタニズム心齋橋」展を除いて実現しなかった。

こうした現代の大阪の文化状況を見て、いつも私は、漁師が海から離れた山林に植林するエピソードを思う。山の荒廃で海の水質も荒れ、漁獲量が激減したため、漁師たちが植林に立ち上がった話である。その意識は漁業問題を超越、自然との共生哲学に達していると聞くが、文化も同じで、採算性だけでは都市は枯れていく。手前味噌かもしれないが、「モタニズム心齋橋」展は世代間を結び、体感温度ある「街の記憶」として都

市の一つの時代を蘇らせ、大阪の精神的な空隙に文化を「植林」する試みであった。それはまた、文化経済の地盤沈下で喪失した大阪のプライド復活につながる祝祭の場の創成だったのである。CEL

(註1) 心齋橋筋の呉服店主で文筆家岡田播陽の言葉。《美
都市・大阪の発見 近代美術と大阪イズム》(大
阪市立近代美術館建設準備室、一九九七年) 図録参
照。

(註2) 会場構成は、「序 ノスタルジック心齋橋 描か
れた心齋橋/鉄橋から石橋へ」、「第一幕 街のこ
ざわいに囲まれた「美術の大聖堂」 心齋橋の百貨
店と美術」、「第二幕 心齋橋と画家たち 求我堂
洋画研究所/小出植重、足立源一郎、中村貞以ほか
」、「第三幕 柳屋 モタンとレトロ口が交わる趣味
の花園」、「第四幕 心齋橋界隈アート模様 画廊、
画材店、書店、趣味人など」、「第五幕 丹平ハ
ウズ/モタニズムの発信基地 赤松洋画研究所と丹平
写真倶楽部」。

(註3) 大正時代の曲を中心にレトロモタン感覚で演奏
活動するグループ。二〇〇四年結成。団長は華乃家
ケイ。

(註4) 「立版古」大志んばん切組と路う 浪花心齋橋鉄橋
の図」中尾書店刊。「朝日新聞」二〇〇五年十月十
七日大阪版と、その後、朝日放送の早朝のニュースで
紹介された。

(註5) 後者については、「遺族の西田彩子さんが、私家版
『金山新六 DESIGN MODERNISM』に開かれた SHOW
WINDOW から、二〇〇五年を刊行」。

橋爪 節也(はしづめ せつや)

大阪市立近代美術館(仮称)建設準備室主任学芸員。
昭和三十三年大阪市生まれ。東京芸術大学大学院美
術研究科修了。専門分野は美術史。主な編著書は、『モ
ダン道頓堀探検』大正、昭和初期の大大阪を歩く(創
元社)、『モタン心齋橋コレクション』メトロポリスの
時代と記憶(国書刊行会)、『没後二〇〇年記念
木村兼葎堂 なにわ知の巨人』(共著、大阪歴史博物
館編 思文閣出版)など。